

---

# 異界嫁日記

とっしー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異界嫁日記

### 【著者名】

とつしー

### 【あらすじ】

地球と異世界をつなぐゲートから帰還した「おれ」。

ワケあり勇者として召喚された高校生のおれは、とあるチートな秘策を駆使して、ゲート内世界を救おうとしたのだが。

その過程で出会ったゲート内世界のお姫様たちや魔剣士、はたまた地球上に帰ってきてからは義妹や女教師が熱いまなざしをおれに向けてきて、さあ大変。

やがてゲートによつて一つの世界が恒常的につながつたことで、おれの女性関係はさらなる混迷の度を深めてゆくのだった。

VR MMOゲーム的な異世界と現実を行ったり来たりのラブコメ  
ディ！

注意：R15相当のレーティング。

## プロローグ

### （イレブンズゲート）

世界各国に異世界と通じる扉が開いたのは3ヶ月前のこと。

アメリカ、イギリス、中国など11の国に、野球場ほどの面積を有する超次元空間が生まれた。

ここ日本にもゲートがある。東京都武蔵野市、都立吉上高校の校庭が丸ごと大ゲートへ空間転移し、もともとあつたグラウンドは次元の彼方に吹き飛ばされてしまった。

それはそれは、世界中が大変な騒ぎになつたそうだ。

もつとも、その時の様子をおれはこちら側の世界から見ていない。各国の軍隊や警察が厳戒態勢を敷き、マスコミ報道もそのこと一色でテレビも通常番組の放送を休止した。いまも報道番組のなかで、検証番組が繰り返し放送されているのを、おれは自宅にもどつてからゆづくテレビで見せてもらつたのだが。

世界中の関心は11ヶ所のゲートに向けられ、その間は紛争中の国家や民族同士も停戦せざるを得なかつたほど。人類未曾有の事態は、宇宙人の侵略か、はたまた天変地異の前触れかと世界中の人類を震え上がらせた。

数日が経ち、各ゲートから人間が姿を見せると、その身柄はたちまち各governmentの保護下に置かれた。

11ヶ所のゲートから一人づつの人間が現れたのだが、日本のゲートから出たのが、この「おれ」だったというわけだ。

おれの名前は、双葉<sup>ふたば</sup>としあき。一年前に行方不明となり、両親を苦しめた親不孝者だ。ゲートがおれの通う学校の敷地に現れたのは、異世界での役割を終えて故郷に帰る者たちのために、神さまがそれぞれの家路に近い場所を選んでくれたからである。

## 第一章 リリーナ・フォーミュラ・ヒル・スター・バックス姫

ゲート内は11大国家が陸と海洋の9割近くを支配するが、どの国にも属さない小国も数多くある。その領地を合わせて、やつと大國家1つ分ほどの自治区を作っていた。

もともとおれを召還したのは、『龍神を王とする鱗持つ民の國』ミズマミシマだったのだが、龍神の代弁者である祀族長オトヒメが年若い少女であつたためか、未熟な術式の結果、被召還者の身体はミズマミシマと関わりのない小国、スター・バックスに現出した。

スター・バックスは人口30万人ほどの国といつよりは、われわれ現代人の感覚で言うところの「市」に近い。貴族制度は無く、王家とその縁戚者と代議士、官僚が統治するミニ行政区だった。

スター・バックスに美貌の皇女あり。リイナ姫。正しくはリリーナ・フォーミュラ・エル・スター・バックス芳紀16歳の愛称が、リイナ姫。

その可憐な姿を思い出すと、授業中の教室であるにもかかわらず顔がにやけてしまう。

その夜、平凡な高校生であるおれの前で、高貴な美姫はその柔肌を無防備にさらした。薄衣の夜着が月明かりに照らされ、下着もつけていないためにその肢体が、ほぼ全裸同然におれの目に焼き付く。

おもわず、おれはつばを飲んだ。

この時点でおれは女性経験が無かつたので、初体験が異国の姫君

相手とあつては気圧されずにいられない。

リイナ姫と出会つてこのとき3ヶ月。幾度か彼女の窮地を救い、信頼を勝ち得ていたおれが彼女と親しくあることを周囲の者もどがめはしなくなつた頃だった。

「ひ、姫、ほ、本当にいいのですか」

リイナ姫がうなずく。恥ずかしいのだらう。顔を伏せてこちらを見ようとしている。

その日、～不死者たちの終わりなき遊技場～と呼ばれる死靈貴族領スラヴィアの、死神モルテの力によつて生み出された死なずの者達、またの名をアンデッド軍団の侵攻を食い止め、あまつさえ不死の軍隊に完全な死を与えたおれは、スター・バックスのみならず隣国領の住人たちからも英雄として崇められるようになつた。

騎士団とともに凱旋したおれは道中、村人たちから熱烈な歓迎を受けつつ、スター・バックス王都マキアートまで帰還した。沿道からは騎士団の先頭を進む馬上の oreに向かつて、花束と歓声が浴びせられた。

富城の前では王自らが妃と皇女を従えて、おれを出迎えてくれた。小国の善君で気さくなお方であるスター・バックス王であつても、これは格別の労いだ。

おれは民衆の前で王に肩を抱かれ、王と並び立つとまるで公国の王子でもあるかのような賞賛を浴びた。

侍従が盛大な宴を催すとおれに伝えたが、固辞した。戦はこれで

終わつたわけではない。すぐに軍議を開くためと書いて、日頃より豪勢な食事を兵たちに『えめる』よう頼んだ。

本当は、敵軍を完膚なきまでに叩きのめし、国境にも警備の騎士団を置いてきたのでしばらくなびりできるとわかつっていたのだが、おれはこうこうときどき振る舞えば自分の評価が高くなるかわかっていた。

おれの根城は、富城から少し離れた区画の離町をあてがわれていた。軍議など開かず、部下たちは町へ繰り出していった。酒場へ行つたか、女を漁りに行つたか。

給仕たちに口止めし、おれは食事をした後、果実酒をさらりに果汁で割つたグラスを手にバルコニーで夜風に当たつていた。

コンコン。檻の木の戸を拳でノックする音に振り返る。

「入れ」

顔を出したのは見慣れた女官。この人がいるといつ」とは……

おれは膝を床につき、胸に手を当てた。

部屋に入ってきたのは、ローブで顔を隠したリリーナ・フォーミュラ・エル・スター・バックス皇女。

「階下で待て」

人払いをすると、彼女は顔を見せた。

「面を上げよ」

年若くとも威厳のある声に恐縮して顔を上げると、そこにいたのは一人の少女にすぎなかつた。

「としあき卿、よく無事でもどつてくれました」

「リイナ姫、だれもいませんから、トッキーでいいですよ」

「トッキー」

サファイヤブルーの宝冠をはめたような瞳に涙がたまる。おれはすかさず彼女の脇に経ち肩に手を置く。

「わたしは皇女失格です」

「なにを馬鹿なことを。道中、騎士はみな姫様のことで話に花を咲かせておりましたよ」

「騎士だけではなく、転戦先の村人とも親しく会話をするようになるべし、必ずリイナ姫のことを聞かれる。評判のよつた美姫なのかと、なにか言葉を賜ることはないのかと。」

「領民を守るために戦地へ赴いた騎士団が勝利したことを喜ばなければいけないのに、わたしはあなたが無事に生きて帰つてきてくれただことだけに心を震わせているただの女です。これでは王家の一員として失格です」

「リイナ姫、おれはあなたにそつ想われていることを心の糧に戦つております」

「トッシー！」

おれの胸にリイナ姫が飛び込んでくる。姫はこれまでも人目を忍んでは、たびたびおれを訪ねてくれていた。そろそろ頃合いだらうか。

「武功を立てても、報賞も断り続けるなど、トッシーの振る舞いにわたしも父王も心苦しく想つております」

現代社会で生きてきたおれは、じうじうときどきのように振る舞えば民衆と上官の歓心を買えるか知つていて。歴史と政治から学んだ。

そして、じうじうときは夜景を見ながら話をすると限る。

「姫、テラスへ」

窓を開けると町の喧噪が伝わってくる。いつもより騒がしいのは、戦勝ムードに湧いているからか。11大国家よりも小国の連合国の方が国民の暮らしさ豊かなようだ。

リイナ姫の肩を抱きながら、耳元で囁くような話しが許され程度の親密さにはすでになれている。

「姫、寒くはありませんか」

まだ秋になつたばかりで肌寒いなどといふことはないが、一応尋ねてみた。

リイナ姫の身長は160センチもないだろう。彼女が前髪があれの鎖骨をくすぐる。

一度、彼女の体が離れてベランダに手を置く。

「トッシー、宴席も辞退し報賞も受け取らぬばかりでは、我ら王族の面子も立ちませぬ」

「よいのです。よいのですよ、リイナ姫。おれは民が無事に笑つて暮らしていれば、それがおれにとっての勲章なのです。そしてひいては、リイナ姫をお守りすることにつながるのです」

少し強い風が吹いた。他の国の姫様はたいてい髪を腰まで長く伸ばしていることが多いが、リイナ姫の髪型は光沢のある銀髪を肩で切りそろえている。先程述べたようにサファイアブルーの瞳から風

に乗つて、しづくが宙に舞つた。

「トッシー、それでもわたしはあなたに褒美を貰えたいのだ。なんでもよいから申しておくれ」

「言えません」

「なぜだ」

リイナ姫が胸元で拳を握る。

「口にするのも、あまりにおそれおおこので」

「よい。申しておくれ。遠慮はいりぬ」

「とても、とても申せませぬ」

おれは顔を覆つぶりして、指の隙間から姫の表情を伺った。姫の容貌は日本人から見ると、西洋人を通り越してもうハーフエルフかと見まごう神秘的な姿だった。

姫はハラハラした様子で ore に願いを言えと迫るが、これがまたなんとも外見に似合わぬミミカルさで可愛らしい。

彼女はおれがなにか苦悩を抱えて、苦悶の表情を隠しているのだと思つてゐるが、逆だった。おれの顔はテレゴレでとても見せられたものではないのだ。

「リイナ姫、願いを申したら聞き入れてもうれますか?」

「もううんだ」

「本当ですか？」

「皇女に」「嘘はない」

「もしかしたら姫を怒らせるかもしれませんよ？」

「かまわぬ。申してみよ」

「では……」

おもむりおれは、リイナ姫の背中まで両手を回し、その身体を捉えた。

「！ としあき卿、なにを？」

「姫、褒美をいただけるのならばわたしの望みは姫ご自身です」

リイナ姫は言葉もない。ただ吐息が漏れた。おれの胸板が彼女の身体に密着する。一條の稻妻がリイナの身体を駆け抜けていった。ビクンと肩がけいれんしたかと思うと、がくっと力が抜けて、まるで操り糸の切れた人形のように、おれの腕の中で動けなくなつていった。

炎のような期待感がおれのなかで燃え上がる。

皇女を想いのままにもてあそんでいるかのように見えるだろうが、このときおれはまだ女性経験がない。

おれはおれなりに使命感を持つて生きているつもりだが、彼女にはじめて会つたときからこの口が来るのを待ちわびていなかつたかといえば嘘になる。

「姫、はじめてお日にかかつたときから、おれは、おれはもう！」

この世界で根無し草のおれは、周囲の信頼を靠るべく紳士的に振る舞つてきたが、もはや限界だ。

おれは鼻息荒く姫の唇を奪おうとする。

「ヒィツー！」

おれの豹変に姫の顔色が変わった。

「ち、ちよつととしあき卿、ま、待つて」

おれが唇を突き出して、姫のそれをふぞりとするのを彼女は細い腕でおれの顔を押しのけようとする。これはちよつと意外だった。ここへ来たときには、もう完全に覚悟を決められているのだと半ば感じていたのだが。

「い、いやですか、姫様？」

「え、そうにつけでは

「じゃあ、続きを

「ま、待つて、まだ心の準備が

「皇女に『言はないと言つたじゃないですかー、やだー』

唇に姫の指の感触。

「一分！　わたしに一分時間をくださいーー！」

両の掌で必死にガードしながら、思い切りのけぞつてあれの顔をかわす。おれが手を離すと、彼女はバルコニーに手を置いて深く呼吸した。

「……」

呼吸を整えたリイナ姫は、振り返つてその両腕を広げた。

「 わあ、ビバ。トッシー卿、遠慮なく」

おれはその腰に手を回すが彼女は緊張しているのか、ぎゅっと口を開じてあごを上に向けている。

彼女の顔におれの息がかかつて、皇女の肩がびくんと動いた。

（今度こそ、今度こそ！）

もう一人を遮るものはない。身分の差もこれだけ武勲を立てれば、障害にならぬであろう。

（やわらかい、そしてつややかな、さすが王族の唇）

逆に自分の肌のさくれを感じさせぬほど、なめらかな感覚があれの唇に返ってきた。

リィナ姫の唇は小さく、強く押し付ければおれの口に飲み込まれてしまう。そつなく離さ。

ぎゅっと、姫の手がおれの肩の衣を掴む。おれは彼女の身体を締め上げぬよう、腰に回した手に力を入れないように氣をつけた。

一分近くそうしていたが、姫が窒息してしまって離された。

「ふつ、はあ」

苦しそうに息を吐き出す彼女。もたれるように頬を俺の胸の埋めた。

「トッシー、わたしは、わたしは少し怖い。」のよつなこと、初めてなのだ

これから起きたことを思つと、彼女が怖じ氣づくのは仕がない。不死者の暴徒に御者を囮まれたときも気丈に振る舞つっていた皇女だが、それでもはじめての性体験の前には、だれしも恐りしさに身がすくむものだ。

逆に「オッケー、トッシー。わたしは経験豊富だからバッチコーアイだ」と言わわれては堪らない。

「リイナ姫、わたしは謀反人でしょうか。あまりにも畏れ多いことをしていることは重々承知しています……ですが」

「と、としあき殿！ 手、手が……」

「え？」

掌にやわらかい感触。女性としてはかなりスレンダーなタイプに属する姫だから、けつしてたわわな感触とはいかないが、貧乳であれ、やはりおっぱいの感触は最高だ。

「つかー、こ、これは失礼を……」

かしこまったく口調とは裏腹におれの掌はリイナ姫の右の乳房を包んでいた。右腕はおれの意思に反してその場所から離れようとしな

い。仕方なく左手でその手を引き離した。

彼女は身体を折つていまにも泣き出しそうだ。おれはじつと手を見る。青林檎のようなまだ硬い発展途上の乳房。声なき抗議をするかのような潤んだ瞳。

バルコニーに並んで夜景を眺めた、さきほど抱擁する前に見つめた瞳も、ロマンティックに濡れた双眸だったが、いまのそれはもういかにも「わたし、もうこれがイッパイイッパイなの」という心持ちを現していた。

そしておれの頭の中もまた、おっぱいのことでオッパイオッパイ……もといイッパイイッパイなのだつた。

「グス……」

姫が涙をぬぐつて向き直る。

「リイナ……」

「夜着にかえて参ります」

おれは窓を閉め、部屋の灯りを消した。姫は隣の部屋へと消える。もともとは王族の離宮で彼女の着替えも揃つていた。

(姫、無理をしているなー)

おれもブーツを脱いで、軍服のトラウザーズとシャツをたたんだ。士官からバカにされるが、シャツの下にはもう一枚下着を着る習慣を変えていない。

ベッドの上で正座のままシャツを折っているおれの背後から声がした。

「としあき卿」

(キ、キタ (。 。) ! ! ! ! )

「リリー・フォーリコラ殿下、とてもキレイだ」

もじもじと身体をくねらせながら、カーテンの陰に隠れようとする姫におれは近づいた。

手を引くと、まるで体重のない精霊の手を引いていふように身が軽い。

カーテンから離れて、月明かりが差し込む窓辺にそのシルエットを照らす。緋のネグリジェに包まれた白い肌が宝石のように神々しい輝きを放っている。

「姫、手を下ろして」

おれに命じられるまま、ふるふるとブリジヤーに隠されていない乳房から手を離れる。

お椀ほどもない、砂丘のようななだらかなふくらみだったが、初体験のおれには、むしろ似つかわしいだらう。なんとか不安のないよつて姫をリードしてせしあげたい。

おれの田線の方が高いので、こうして向き合つてこると捕虜を検分しているような気まずさがただよつてしまつ。

「リイナ、こちらへ」

ほつそりとした肩を抱いてベッドに導くと彼女は、するりとシーツの中に身を隠した。

「明かりを、もそつと暗ぐ……」

おれはカーテンを閉めた。電灯もないから、部屋は月明かりが数条差し込むだけで青暗の闇に包まれた。

おれは目がいい方なので、すぐに闇のなかでも視野がもどる。

「姫、隣へ入りますよ」

「……参れ」

おれは吹き出しそうになる。皇女からすれば、男女の和合も武人にとっての初戦のようなものなのかもしれない。

(おつと)

声が漏れないように唇を閉じ、彼女の隣に侵入する。

「不思議な……気持ちです」

彼女の言いたいことはなんとなくわかる。

「今まで人目を忍んでお逢いしていましたが、とうとう一線を越えることになりましたね」

異界の迷い人だったおれの水先案内役を引き受けてくれたリリー。貴族でもない、ジijnの馬の骨ともわからぬおれと親しく接してくれた。

「あなたとは良き友人になりたいと思っていました。なのに、逢うたびにそれ以上の感情がわたしのなかで育つていくのです」

「おれは友だちでありつけたいと思ったことは一度もありません」

「え？」

悲しそうな顔で姫が振り返る。

「ずっと友だちなんて嫌です。姫が時おり陣中見舞いに来ててくれたときも常にわたしは、どうやつたらあなたの心を自分のものにできるか考えていました」

おれは姫の身体に体重をかけぬよう手とひざをついて、彼女にまたがった。シーツは上等なものなので、つるつとした感触でおれの背中を滑り落ちていく。

「夜着を脱がせせていただきます」

ビリッ。（あつ、いけね）彼女のネグリジェを破いてしまった。

（ええい、かまつもんか）おれは自分の肌着を脱ぎ捨てベッドの外に放る。

じつして一糸まとわぬ男女の裸身だけが闇のなかに現れた。

姫は唇を噛んで恥ずかしそうに耐えているようだ。右の腕で胸元を隠しているが、左手は観念したように投げ出されている。

その手があれの頬に触れ、それから首筋を這い胸元に触れる。

「意外と柔らかな肌なのね。もつとされたくれた感触かと思つていました」

現代人の生活に慣れた俺の肌は、この地方の人間ほど荒れていな  
い。それでも辺境での戦を繰り返して日と乾燥に焼かれた方だが。

「そばで肌を見るのは二度目」

城内でおれが半裸で稽古しているところへ、姫がやって来たこと  
がある。

彼女は俺の身体を見て驚いていた。

「傷を受けたあとがまつたくないな。そなたのような強者は、不覚  
をとったことがまるでないのか？」

おれは、傷が治りやすい体質なのだと答えた。常人なら医師に縫  
合を頼むような負傷でも、一晩も経たずに跡形もなく治ってしまう  
のだ。

おれの下で仰向けになっている乳房はもとから小ぶりなので、重  
力の方向が変わつても形の変わることがない。

もう無言で、ゆっくりとだが遠慮もなくそのふくらみに手をかけ  
た。

「あつ……あつ

リイナ姫の声もか細くなつていく。

「ハーハー、おどろいた。」  
わからぬが、今夜この瞬間はリリーナ皇女がおれへと『『』』えた褒賞なのだとその想いに甘えることにした。

彼女の首筋に唇を這わせる。

「ふゅう、あ」

くすぐつたいたのだらつ。身体が硬直し、顔が左上部に振られる。

おれは視線を真ん前に向ける。おれの掌の中、指の間、ささやかな曲線の頂上にはさくらんぼつのような赤みがつよこさんとかわいらしく息づいている。

唇で果実をはさむと、「ヒッ」という甲高い声が漏れ、彼女の両手が、右手でおれの頭を抱き、左手でおれの口を敏感な部分から引き離そうと力を加えていた。

ウォーリアの鋼鉄の身体を押しのけるのは女性の力ではまず無理だ。おれはおかまいなしに、このときばかりはあるでこの土地の貴族のように葡萄のふさを舌で転がすのであった。

なにぶん童貞なので全身の隅々まで攻めるような連鎖的愛撫も思いつかず、そのときの俺の手は皇女の胸とお尻を往復するばかりの単調な動きしかしない。

人間の肉体は強い刺激にもやがて慣れる。羞恥心にも免疫ができる

てきたのか、姫の身体からも緊張がほぐれてきたようだ。

「はあっ、はあっ……」

リイナ姫の熱い吐息が耳にかかる。相当な熱量がこもっている。顔だけでなく、まるで風邪でもひいているかのように、全身が暖かくなっている。

おれの目線は、姫の首筋を見つめる位置にあった。

不意に彼女は上半身を起こした。

(どうした?)

皇女は、おれの首に手を回して顔を近づけた。潤んだ瞳、せつなげな吐息。その口元が一瞬、きゅっと結ばれる。

カツンという硬い音がしたのは、おれと彼女の歯がぶつかったときだ。今度は姫の方からの熱い口づけ。

「んんっつ、むぐう」

姫もなかなか情熱的などいろがあるようすで。

彼女に舌を擱めるようなテクニックはないと思つが、強く口と口が接すると少し呼吸をしただけでも舌が触れる。

「……！」

「……。」

そのことに気づいた姫がぱつと顔を離し、思わず口を手で押える。まだまだ恥じらが強いけれど、おれの興奮は逆に高まるばかりだ。

「姫、もう一度よろしいか

姫は首を横に振る。

(そんな、つれない)

「姫ではあらせん。こまはただの……なんとこいのでしようが」

もじもじと胸の前で指を合わせている。

(ああ、もうこいつはやめようか)

「ホン。咳払いをひとつ。あらためては、おれも呼びついのだ。

「リーナ、あなたはいまスターバックスではなく、おれだけのプリンセスだ」

「トッシー」

そう。こまのおれと彼女は、皇女と騎士団筆頭騎士ではなく、ただの恋する男女に過ぎない。

「こんどはおれの方から唇を。童貞ではあるがキスの経験ぐらうはあるので、ティープに彼女の唇、それから舌を吸つた。

「なにか、すうぐ凶暴な感じがします」

「そうかもしれない。胸を玩ばれるより、舌同士の感覚は鋭敏だ。「キスでとろける」なんてフレーズもあるぐらいだし。

リリーナは深いため息のような深呼吸をひとつした。

「慣れてこるのはね」

自分ではむしろ奥手だと思うのだが、純潔の乙女からしたら経験豊富なプレイボーイに見えるようつだ。

「そんなこと……ないよ」

「でも、あなたの周りにはたくさん女性が」

「たくさん? だれのことですか」

「ハイブリルやミサキたちがいつもあなたのそばに

ハイブリルは別の国に召還されたアメリカ人の女の子だ。敵の戦力として十分な教育を受ける前に、一手先んじてこちらの陣営に引き入れることが出来た。

「あいつは副官だし、おれのことをそんな目で見ていませんよ」

ハイブリルはおれの副官といつになるとになっているが、マイペースでおれの部下とこう感じもしない。ゲートの外の人間が数少ないから、おれに愚痴を言つてばかりだ。

『としあわせ、早く戻れるよつになんとかしろ』

向こう側に帰りたいのは当たり前だが、彼女はいつもおれをせつつく。

彼女をこちらの陣営に引っ張り込もうと口説くときに、「元の世界に帰りたいだろ?」と散々心を揺さぶったので、おれは彼女に地球帰還の義務を負うよつな形になってしまった。そのかわり、彼女も特殊能力を駆使して、おれの軍隊への貢献度も高い。

姫の言葉にもどるが、

「わたしの父もそつですが、地位の高い男はいろいろと方々に女性を囲うものが多いとも聞いていますし。まして、あなたはどこへ赴いても英雄として……」

(「英雄、色を好む」ということを言つたのかな。まあ、文明度からみても封建的な世の中だよな、こつちは)

温和で話の通じるスタバ王だが、それでもまあ、前時代的な父権をかざしているよつに見える。

おれは一応救国の英雄といつことで広く知られていた。噂と評判が入づてに広まっているようだ。だから、遠征先でもやりたい放題

だれかと、姫は諦観していくよひだ。

## #7 (後書き)

ITランディングにのつたらどれだけアクセスが増えるのだろう  
軽い気持ちで評価点入れてみないか？（チラッ）

## 第一章 了

だが、実はそんなこともないのだ。実際、他国の領主に饗應を受けることもあり、氣を利かせて美女を侍らしておれをもてなしてくれたこともあった。

正直、ふらふらと誘惑に流されてしまつてころだつたが、おれのそばには常に前述の女騎士エイブリルや、おれといつしょに地球から巻き込まれ召還した少女、美咲がいて、おれがハーネトラップにかかりそうになるとおれの耳を引っ張つて耳もとでわめき散らのだ。

「あんたね、なに鼻の下のばしてんのよ。こんなの罠に決まつている。だいたいあんな色仕掛けの宴会に同席させるなんて美咲の、子どもの教育に良くないでしょうが！」

美咲はまだ小学校に上がつたばかりの女児だ。ここではおれしか頼れる者がいない。

こんな調子でいろいろ監視が厳しいために、おれだつて本当は色に溺れたかつたんだが、いまのところ清廉潔白を貫いている。

まあ、それがおれの良い評判になつて民衆から慕われる一因にもなつてゐるのだから悪いことではないのだが。

「ときにしあき卿、いかがですか。今宵は英氣を養つては

地方の公爵や、やり手の商人には、日本風に言つと「ガツハツハナオツさん」が多くいて、純粹に厚意と労いで夜伽よじかを勧めてくれることもあった。

宿で待つていれば女性が訪ねて来たのだろうが。こうこうチャンスも「じご」とくエイプリルがたきつぶした。

「我らは矛を持たぬ民の盾。女に現を抜かしている暇などない！」

エイプリルが剣を掲げ高らかに宣言する。周囲は感心しきり。おればがつかり。

「せうだよな、リーダー！」

冷たい目線でエイプリルがおれに釘を刺す。

「うん…… そうだね」

こんな調子だから、リリーナ皇女が心配してこるようなことはまだ起きてない。

「トッサー、ここのですよ、本当のことを言つても。そうだとしても、わたしは責めたりしません」

「ほんとうになにもないんです」

無理矢理でも清廉潔白に振る舞わされているので、出会つ土地の者たちはおれを枢機卿かと思い込む者までいたぐらいだ。そうでなくともおれをテンプルナイツか僧兵だと思つている人間が多かつた。

「本當？」

姫は半信半疑のようだ。おれは一度つなづく。（結果的にだけ）

「こわかこは、信じられませぬ」

（無理からぬ。結果論だからね。チャンスはたくさんあつたし）

思に出すだにこましましてハイブリルの所行。

（でも、姫さま、あなたと民をお守りしたいと黙つて戦つてこののは本心ですよ）

おれは最上の笑みを作つて親指を立てた。ビシッ。

「童貞も守れなこよつな男に、何が守れるところですかー。」（アーヤー）

ヒューリックと呼ぶ風。

（あ、これ、はずしたな……）と思つたのも束の間。

## 第一章 義妹と女教師とおれの過去

「キャー、としあきー、抱いてーーー。」

感激した姫がおれにタックルして、おれたちばぐるべるとベッドの上を転げまわった。

「はあはあはあ、としあきー、もつわたしも恐れませぬ」

壁は崩れ、あとは若い情熱をぶつち合ひのみ。

「痛いーーー。」

姫が思わず跳ね起きる。

(あひやー、やつぱそつかー)

「で、でも耐えます！ あなたの戦の痛みに比べればこれしきの」と……

(なんていじましこんだ)

おれはこいつを彼女のことを愛しく思つたのだつた。

次からりはきつと、つまくいくだり。

リリーナ・フォーミコラ・エル・スター・バックス姫とのことせん  
残りだったが、おれは地球に帰つて來た。

やうやうと、ゲート内世界が抱えるすべての問題を解決してからのことだ。

おれにはどうでも、この世界にもどうなればならぬ理由があつた。

リリーナ皇女は泣いておれを引き止めた。

おれもつらかった。

おれはこいつの世界では、あれだけの美人に好意をもたれたことはおいか、ステディな彼女すらいた試しがない。

「行かないでおくれ、としあき」

おれの一腕にしがみついて、ぎゅうぎゅうつとおれの身体を抱きしめてくれた。

サファイアブルーの瞳から、青真珠のような涙がこぼれる。

その美貌を思い出さない由はない。それどころかいつも授業や休み時間ごとに想い出してくる。

「ああ、リイナ。またすぐにでもゲートの中にもどつたい……」

そんな夢想に浸っていると、クラスマイトたちのざわつく声が聞こえてきた。

「なんだ？」

教壇にはいつも担任教師、それと見知らぬ女性教師が立つていた。年齢は若い。ベージュのスーツに薄い紺色のブラウスを着ている。髪も染めていない、真面目そうな印象の女性。

「えー……今日から三週間……大学の……教育実習……」

担任教師に紹介されたのは、新しい教師ではなく、教員免許を取得しようとする女子大生だった。

「うおー、かわえー」

「ひゅーひゅー」

男子生徒から上がる歓声。女子も珍しい客人に、大いにはしゃいでいるようだ。

短い紹介を終えると、担任教師は教室を出て行つた。

(あれ、どこかで見たような顔の希ガス……)

白黒が黒板をこする音。

「中原涼子」、それが彼女の名前だった。

(はつー) おれは思い出した。おれは彼女を知つてゐる。

(これは……まずいんでないかい?)

彼女もおれを知つてゐる。でも、おれのことをもう覚えていないかもしねりない。ほんの短い間、同じ場所にいただけだから。

## 第一章 義妹と女教師とおれの過去（後書き）

感想と評価ポイントをいただけますと作者の励みになります。  
よろしくお願い申し上げます。

彼女は自己紹介で、 大学の四年生で外国語学部の学生だと  
言っている。中学高校の教員免許は通っている大学の学部で取得で  
きる教科が異なる。

彼女は英語教師になりたいのだといつ。

(……気つきませんよつに……)

ふつづく、授業のたびに出欠はとらないが、はじめの授業といつ  
ことで彼女は出席簿の名前を読み出した。

(あのときせ、ちがつぬ前だつたけど)

中原先生は、ひとりひとりを起立させて名前と顔を覚えよつとし  
ているみたいだ。

「北佐和くん」

「はー」

「塚原さん」

「はー」

「藍川くん」

「つーつす

つかのクラス連中も行儀がいいのか、わざわざ起立して返事をしている。その都度、中原先生がまじまじと生徒の顔を見つめている。やがておれの番が回つて來た。

「双葉……ふたばとしあきくん!」

調子が出てきたのか、教室の空気になじんできたのか、やたら快活な口調でおれの名を呼ぶ涼子先生。

(なんだか、小学校の教育実習みたいだ)

おれは、なるべく彼女と目を合わせなこと、やる気のない生徒をよそおつてうつむき加減に起立した。

「ウウヒーイ( ००० )」

「ひひ、眞面目に返事しなさい!」

「は、まい……」

( やば、セシマーが近づいてくる )

中原先生は、おれの右斜め前に立つた。おれは校庭の方に視線を避けた。彼女は一、三度出席簿といちらを交互にうかがつた。

「先生の方を向きなさい」

：、—、、。、。、チラツ

—・、)、ササツ —

おれは一瞬だけ先生の方を見た。

「……」

中原さんはじぶかしげに腕組みしている。

「……」

「ねえ」

「……はー」

「じいかで、あなたと会つたことないかしら？」

「いえ、ないと思こまわ」（キッパリ）

ポーカーフースで答える。

「気のせいかしら？」

「ですね」（にっこり自然な笑みで）

涼子は、ためいきを一つ吐いた。

「座つていいわよ」

おれは着席した。やれやれ。

教室が少しづわつしてきた。周囲からしたら奇異なやり取りだから仕方あるまい。

「先生、どひしたんですか？」

一人の女子生徒が挙手して質問する。

(こらぬことを…)

また中原先生も、いい笑顔で答える。

「先生が高校生のときの同級生に似てたから、ついね」

どひと教室が湧く。ヒューヒュー。誰かが口笛を吹いて囂し立てる。

(うぜーぞ、ガキども…)

また、別の女子生徒が追い打ちを掛ける。

「えーなんでー？ その人のこと好きだつたんですかー？」

(やめろって、まじで)

中学生高校生は「うう」話大好きなんだよな。

「うーん、そうねー。実は、ちょっとといいなって思ってたのよね。ちょっととの間だけ同じクラスで、その人すぐ転校しちゃつただけどね」

(また、あんたもいちいち話を合図せなくていいって)

「もしかして同一人物だつたりしてー」

中原が苦笑する。

「もしそうだつたら、落第何年生？ ありえないわよー」

「」の問いには、クラス一同だれも笑つてない。

「えー？ だつて、ねえ」

「うん」

「だよな」

数名の生徒が顔を見合させた後に、おれの方を向く。それに釣られてクラス全員の首が動いた。

「うひ」

まづい展開だ。

「だつて、とつしーは留年大王だしー。たしか先生と同じ年ぐらいじゃなかつた?」

(ヽ( 0 w 0 ; ) ノ オンドウルル オンドウルルラギッタン  
ディスカー!)

とうとう確信に近づいてしまった。

「え、留年……大王つて……そつなの? 双葉くん」

「だれが留年大王ですか、だれが滝沢秀明ですか」

「滝沢秀明はだれも言つてないでしょ」

(自分でさちよつと似てると思つてゐただけど)

先生「……」

おれ「……留年は一回しかしてませんよ」

「あら、やうなの」

クラスの連中は無責任な」とばかり言つ。たしかにおれは二年一歳だが、留年はゲートの中についた一年分だけだ。

「一度社会人になつて、それから高校に入り直したんですね

「いめんなさい、無神経な」と言つたわね

「それはいいけど、そろそろ授業はじめた方がいいんじゃないすか？」

涼子は時計を見て、顔色を変えた。

「いつけない、もう一〇分も経つてる」

教育実習生も期間内にノルマの授業をこななければ、教員免許を取得するための単位がもらえなくなるはずだ。

「コホン」

姿勢を正し、咳払いを一つして彼女は授業を開始した。

「じゃ、あらためて。実習が終わるまでの間、よろしくお願ひします。では、教科書の30ページから、文型の区分についていくつかの例を示します。

1 . You must come back before dinner .

2 . You look great in your new dress .

3 . He quickly finished a few math problems .

4 . She brought me some CDs .

5 . She painted the table red .

教科書の例文の中から、それぞれの文と同じ文型の文を選んでください。

まず、1番の例文から探ししましょう

生徒に『えられた時間は一分だつた。

「『1 . You must come back before dinner .

これに該当する構文を答えてください。

では、双葉くん?「

おれは立ち上がり、答える。

「選択肢c。『The basketball game sta  
rts at four this afternoon.』」

「はい、正解です。同じ答えだった人、手を上げて」

おずおずと数人の手が挙がる。気恥ずかしくて反応しなかつた者もいただろう。

「では、『2. You look great in your new dress.』の答えを考えて」

また一分が過ぎた頃、先生は生徒の席の間を歩きながら、一人の生徒の前で立ち止まった。

「はい、どうだつたつかな、双葉くん?」

(またおれかよ!)

ふたたび指名されたおれは、また正答した。

「bの『You should always keep you room clean.』です」

「のあたりから、おれも正解が曖昧になってきた。

「『3. He quickly finished a few math problems.』」

「これからは30秒の時間しか『えられなかつたが、やはり特定の生徒が回答を求められた。

教室の生徒も違和感を抱き始めた。

「『I'll always remember that wonderful day.』です」

「他に正解だつた人は?」

先生は、少し嬉しそうに微笑んでいた。

(どんだけ意識してるんだよ)

みんなも同じ事を考へてゐるはずだが、彼女自身はかまうことな

く、質問を続ける。

「『4. She brought me some CDs. の答えは、『a』、  
The sun gives us light. 』

残された選択肢は一つ。

「『5. She painted the table red. 』と同じ構文は、『I want you to be honest』」

「はい、よくできました。全部正解できたら、英語の構文を理解できていることになります。双葉くん、どのように構文を区別したか説明してください」

そこからは、授業の半分をおれが行っているようなものだった。

「えーと、例文の5文は順番を変えて、それぞれ英文における基本の5文型に副詞句を加えていきます。

- 1 主語 + 動詞
- 2 主語 + 動詞 + 補語
- 3 主語 + 動詞 + 目的語
- 4 主語 + 動詞 + 間接目的語 + 直接目的語
- 5 主語 + 動詞 + 目的語 + 補語

これと同じ構文になる選択肢を見分ける手順で区別しました。

まず文章から主語と動詞を探します。これで構文のSとVが埋まるので、その他の単語を補語と目的語に分別します。

文の前後の『時、場所、様子』を表す語句を副詞句として、選択肢にある文章をS・V・O・Cに置き換えた構文として考えます

迷うのは目的語と補語の区別だ。

「例文と選択肢はみなさんを惑わせるために、副詞句の数が一致していないものもありますが、文章の構成としては同じものになります。

目的語と副詞の区別は、論理的にはVの後ろにある語句と、その前方にある名詞との間に、『aはbだ』『aがbする』という意味が成り立つ場合には目的語、そうでない場合は補語になります」

アメリカ人はべつに自分たちの言葉をいちいち分解して、構文を意識しながらしゃべったり聞いたりすることはないだらう。

「言葉といつものほ、もともと学問ではなく道具であり、学問やビジネスを行つたためには、構文を意識する事無く自由に使ってこそのノリコーケーションツールではあります。ですので、会話や英作文を日本語のように使えるようになるためには、暗記するよりも英語に慣れる、馴染むぐらいに、見る聞く書くと、なるべく五感を使使した学習が必要になります」

授業が終わると、やはり中原先生はあれに向けて、ちらちらと視線を送りながら、去つて行つた。

昼休みであるが、授業が終わってもクラスメイトたちの好奇の視線がチチラチラと浴びせられている。

「じー」

隣の席の女子生徒が、無遠慮な視線を投げかけてくる。

「なんだい？ 吉岡さん」

「先生と知り合いなの？」

他の生徒は、おれと田代が会ってそうになると、たれつと田代線をはずすが、彼女は遠慮がない。

「ちがうつよ」

「中原さんの好みのタイプなのかしら、双葉さん」

「かもしけないね」

「チャンスなんじゃない？」

「ははは（苦笑）」

「おつきあいを考えてみてはいかがかしら」

なにを思つて、吉岡がこんなことをけしかけてくるのかはわかつ

ている。

「いいねー、教師と生徒の禁断の恋愛ってか」

「わたし、携帯小説家になりたいの」

「知ってるよ。いつも携帯でなにか文章を打ち込んでるよな」

「読者受けしそうな題材だわ。先生とおつき合いできたら、取材させてよ」

「『めんこい』もる。それに涼……先生とはなんの関係もない」

おれの恋愛経験はあまり携帯小説の女性読者向きではないと思つたが。

「ファンタジー小説を書く気はないか?」

それなら協力できないこともないが、でもそつちは供給先が別にあるのでやはり吉岡にネタを提供することはできないな。

「ファンタジー小説? あんな超次元ゲートが目の前にあっちゃね、もう空想に入る余地がないわ」

吉岡は窓の外を見た。

都立吉上高校のグラウンドは消失し、いまは異世界への出入り口になっている。イレヴンズゲートと呼ばれるのは世界に十一ヶ所存在し、基本的にはゲートの出入口が存在する国家が、両世界の通行を管理をしているが、地球側の一部情勢不安な地域や極地などは

国連が管理する例外もある。

「いまも、異世界を見聞したいという勇氣ある市民が千人ほど列を成して通関の順番待ちをしている。」

そのため、グラウンドを使えなくなつた生徒たちのために、体育授業や部活動は少し離れた市営体育館を吉上高校専用体育館として使用することが認められた。

「そうかもしれないね」

ゲートの向こう側では、かつてのおれの部下たちが、地球人の入国審査を行つていると吉岡に話すことはできない。

「さて、昼飯だな」

「また、先輩がいらっしゃいますね」

「ん？　ああ、そうだな」

吉岡の言う「先輩」とは……ちょうど現れたようだ。ここは携帯小説家志望の吉岡がはじめて彼女を目にしたときの描寫に読者のみなさんへの説明を譲ることにしておいた。

吉岡がなにか言いかけて止まつた。クラスのほかのみんなもぐくりと一方向へ振り返つてゆく。

「彼女」がはじめてこの教室に姿を見せたとき、

「？」

みんなの視線を追うと、教室の後方の扉が開いていた。わたしと双葉としあきの席は一番後ろの列にあるので、右方向に首を曲げる向きになつた。

そして、そこに「あのひと」が立っていた。まるで漫画の中の登場人物に見えた。

まるでアニメーション番組の1シーンか何かのように、比喩でもなく彼女はそこに描かれていた。

まず、日本人形のような漆黒のロングヘアに目を奪われた。

神職を思わせる神々しさを放つなら巫女と表現すべきかも知れないが、日本人らしからぬのは、吸いこまれてしまいそうになるほど美しい双眸だった。宝石のように輝いている。

せつとて、近寄りがたい威厳を放っているわけでは決してなく、むしろ保母さんのような温かな笑みをたたえ、教室の空気は艶やかになつてゆく。

なんのアクセサリーも、ピアスはおろか、ヘアバンドすらもつけていない。化粧をしている様子も無い。制服は、わが校のオーソドックスなセーラー服だが、たとえジャージの上下を着っていても、その異彩は衰えることなどないだろう。

人形のような顔立ちだが、けつして不健康そうな色白の肌ではなく、冴え冴えした白さにほんのわずかだけ、ピンク色の頬。照度の暗いところならば、眼を凝らさなければ気づかないだろう、デリケートな配色。

男子たちは呼吸するのも忘れているかのように、無言で彼女を見つめている。

そんな無遠慮な視線には馴れているのか、表情一つ変えずに彼女は、こちらへ歩いてくる。

(「うひへ？」)

教室の後方を足音も無く歩く。スラッシュ長い手足も、わずかになびく長い髪も、女子にしては少し背が高く、それでいて細い身体つきも、何もかもがカッコ良い。クラス中の視線が監視カメラのようになに彼女を追う。確かに、これでは「こつち見んな」という方が無理だ。

もうすでに彼女は、わたしの一歩前に来ている。この方向にはわたくしともう一歩しかいない。

(え、あたしに用?)

と思つたら、わたしの脇を抜いてもう一歩前へ。わたしの後ろにはもう一名しかいない。

「忘れものよ」

彼女の楽しげに弾む声を聞いた。そんな彼女の表情を、肩を震わせる愛らしい仕事を、わたしはチラリと見ることに成功する。

「ああ、すまないね。サツキ」

彼女はそつと両手をもちあげる。その指には弁当箱の包み。

「そういえば……」

双葉としあきは社会人学生でかつ、いつも弁当を持参していた。男だからにまめなことだと感心したものだ。それがだれか女性の手によるものだとは思いもよらなかつた。

「……双葉先輩」

一人を見て、教室の中には何とかを囁き合っている者もいた。

「知ってるのか？」

「ああ、三年のフロアまでちょっと見学に行つたんだ。ほら、ウチの三年に半端じゃない美人がいるつてウワサがあつたろ！」

勇猛果敢に聖域に侵入した勇者がいたようだ。男子生徒的好奇心、侮りがたし。

その噂の主が彼女であることは、確かめるまでもない。

（それにしても、入学してそれほど経つわけでもないのに、なぜ双葉としあきは上級生の美少女とかかわりを持っているのだろう。しかも弁当の差し入れなんて！？）

しかし、そのときわたしはある事実に気付いた。なぜ、もっと早く気付かなかつたのだろう。

（あれ、待てよ。双葉としあき……双葉サツキ……、サツキ……先輩！？）

と、まあ、最初に我が妹を紹介したときは、吉岡もたいそう驚いていたようだ。

「兄ちゃん、いつしょにお毎を食べない？」

なんとも奇妙な話に聞こえるだらうが、同じ学校に通いながら、妹のサツキがおれの上級生なんである。

「やつすまじ」と云つて。屋上でも行くか

クラス中の注目を集めながら、上級生がいつしょに教室で食事するのも、上級生下級生双方が食べづらいやう。

おれは席を立つた。廊下に出ると、屋上に続く階段へ歩き出す。向かう先は廊下の一一番突き当たりだ。

「おこ、そんなこくつくなよ、恥ずかしいじゃないか

サツキの肩があれの上腕に触れるほど、ぴたりと密接して歩いている。

「そんなこと気にするなんて、おかしいの」

彼女が楽しそうに笑う。しかしると弾けそうなほど明るい笑顔だ。

廊下を歩く彼女を目にしたすべての生徒が、無意識に彼女が振りまぐ、色彩の柔らかさに照らされる。

並んで歩く二人は、兄妹というよりも恋人同士のようにならぬか。  
見えないな、やつぱり。

もうすぐ六月だ。梅雨になれば、屋上のベンチで食事をできる日  
は少なくなるだろう。昼休みにまっすぐここへ来た数名の生徒が、  
すでにそれぞれの弁当の包みを開いている。

おれたちは、転落防止用のフェンスを背にするかたちで同じベン  
チに座った。

「はい、兄さん」

サツキがサンddieチをワンピース、おれの口元に運ぶ。

「……」

対面には男子生徒の三人組がこちらを、ビックリしたように見て  
いる。

(ううう、恥ずかしい)

おれはサツキの手からパンを取ると、それを自分の手であらため  
て口に入れる。あまりにもおれたち一人の佇まいは違ひ過ぎて、周  
囲の人間はおなじ環境の中にイメージが結びつかない。

『妹さん、すごい美人ですね』

よく言われることだ。その後に必ずいつも言われる。

『似てませんね』

そりゃ、そうだ。血がつながってない義兄妹だから。

彼女と兄妹になつて、もう何年経つだらうか。はじめて出会つたのはおれが一二歳でサツキが九歳だったはず。

おれが親父に引き取られてからすぐ、とこうより初対面の瞬間から、サツキはおれになつた。

「兄さん、クリーミーソースがほっぺについてる」

「うん?」サンドイッチからみ出したサワーソースの感触。

「べうひ」それを小さな感触が、温かくて濡れた舌がなめとつた。

「ひやああひ」

おれは思わず乙女のよつた声を漏らす。

「うふふふ

サツキは、以前からお兄ちゃん子だったのだが、おれが一年の間ゲートの中にいて離ればなれだったこともあって、最近は行動がエスカレートしてきている。

「おまえなー、家の外では控えろつて言つたら

「うふふふふ」おれがゲートから帰還してからは、基本的にはいつも上機嫌の妹である。

おれたちの異常な仲の良さが、学校内でも噂になりつつあるのは自覚しているのだが、妹はまるで気にしていないようだ。

バタッ。牛乳パックの地面に落ちる音。おれたちのものではない。

そこに立っていたのは、ゲート内世界ビヨンドにおいてはスター バックス騎士団の副官としておれと行動をともにしていた女性、エイブリル・カエノメレス。

なんで彼女がこんなところにいるかというと、ゲートから11人の召還者が帰還してしばらく経った頃、彼女の故郷アメリカから、急に日本へ引っ越してきたのだ。

そのときも一悶着あつたのだが、それはまたあとで説明することにする。とにかく一八歳の彼女は日本で暮らすことにして、この吉上高校に転入してきたのだ。

学年はサツキと同じ三年生。クラスはちがうが、サツキもおれとエイブリルの関係は知っている。つまり、彼女もまたおれの上級生ということになる。ゲートの中とは上下関係が逆転してしまった。

身長はおれとサツキの間ぐらい。アメリカ人だが、日本人に近い黒髪のショートヘア。ショートになつたのは、おれがある事情で咄嗟に彼女のロングヘアーを剣で断ち切つてしまつたからだった。

ブリュネットという言葉は、栗毛の女性を指すのだと思つていたが、英語では黒髪の女の子もそつ呼ぶのだと後に教えてくれた。

『髪を斬つて悪かつたな』とおれは謝つたが、彼女はあきらめたようだ、戦地においてはショートのままでいた。帰還後はしばらく伸ばしていたようだが、来日したときは再びショートヘアにしていたのだった。

彼女は日本の女の子が肌の手入れを怠らないことに驚いていたが、郷に入ればなんとやらで、それまであまり気にしていなかつたそばかすを、せつせとフーウンテーションで隠すようになつてしまつた。（べつに、そのままでもかわいいのに）声に出すと、サツキがなにか言いそつなので、おれはだまつていた。

「おふたり、恋人みたいね」

おれは「コーヒーを吹き出した。

「あら、やう見える、エイプリル？ ビリしましょ「つ、兄さん」

「お、おかしなこと言つなよ、エイプリル」

「あんたたち、いつもそんなにベタベタしてゐわけ？ 正直、ちゅつとキモいんだけど」

おれは狼狽したが、サツキは対照的に顔をほころばせていろ。

「そらみる、サツキ。おまえは「これが普通だなんて言つたぞ、第三者から見たら、おれたち相当変な関係に見えてるんだぞ」

「エイプリル」

サツキがエイプリルに質問をした。

「あなた、兄弟はいる？」

「いないわ。一人っ子よ」

「お兄さんがいなかからならないのよ、兄妹ならこれが普通よ」  
サツキは両腕をおれの左肩に回してきた。ぴたりとくつき、  
あごを肩に乗せていく。

(いやいや、そんなことないだろ)

エイプリルもぶんぶんと首を振った。

「アメリカにだって、そんな兄妹はいない」

「じゃあ、国民性のちがいね」

苦い表情でいたエイプリルがふっと、口元をゆるめた。

「いいわ。わたしは兄弟がないから、二人を見て正直少しうらや  
ましいかなって思う」

彼女はおれの隣に座つて、牛乳パックにストローを挿した。

「としあき卿……ゲートの中でもこっちでもモテモテなのね」

「ブホオ！」

## 第一章 了

おれはふたたび、牛乳を吹き出した。

「あら？ それは初耳ね。どうにつけとかしら、エイプリル」

サツキの頬がぴくりと痙攣しているのを、おれは見逃さなかつた。

「授業中に教育実習の女子大生にアタックされてたって聞いたよ」

エイプリルの口調にまるで悪気なし。あとで久しぶりの軍議を開かないといけない。サツキはおれにとつての爆弾なのだと教えておけばよかつた。

「兄さん、そんな面白いことがあつたなんて報告しなかつたわよね」

さきほどまでの天使のような笑顔から一変、いまは撫然とした仮頂面になつている。

「面白くない、面白くないって！」

つぶらな瞳が、いまは疑念をたたえて細められている。

「例の、『裏の仕事』がらみの女なんだ。五年前に接点があつて偶然、教育実習生でおれらのクラスに来てしまつたんだ」

「例の仕事つてなによ？」

エイプリルは、おれがゲートの中に召還される前のことを知らな

い。どうして、おれがイレヴンズゲート十一柱と呼ばれる召還戦士のなかで、世界の命運を賭けたゲームのキャスティングボードを握ることが出来たのか。

「でも実習生は、としあきのこといろいろ根掘り葉掘り聞いたけど、彼は他人の振りしてたって」

サツキのただならぬ様子に、エイプリルはおれをフオローする側に回った。

「そんなの、当たり前よ！」

(ひえー)

サツキの怒りがエイプリルにも向けられた。

この怒り方は尋常でないとエイプリルも思い知つただろう。

「あ、でもさ、としあきは彼女の知人だつてことをかたくなに否定してたつてよ？ 先生の方は昔好きだった人に似てるつて言つてたらしこけど……」

「馬鹿！ よけいなことを」

エイプリルはいつも、良かれと思つておれを窮地に陥れるのだ。

「へー」

ギロツツとサツキの瞳がおれたちを刺す。おれは彼女と視線を合わせぬよう足元の、ゴム状の床を見ている。首筋には脂汗が浮か

んでいた。エイプリルはフォロービーが、どざめを刺してしまったようだ。

サツキが立ちあがつた。鬼のような形相で、ベンチに腰掛けたままのおれを見下ろす。

「どうなのよ？」

ガツツ。腕組みしたまま、彼女のつま先がおれの脛を蹴りあげる。

「ヒィッ！」

思わず、エイプリルが声を漏らした。

「いくらなんでもひどすぎる。これが兄に対する妹の態度？」

「うぬせーーー」

髪を振り乱し、目元が乱れ髪に隠れる。

「だいたい、あんたも何なのよ。わざわざアメリカから日本まで来て兄貴のそばをうづうづと」

どれだけの時間が経つただろう。彼女の顔色を伺おうとする。まだ同じ目で見下ろしている。まるでエイプリルも同罪のように、冷たい眼差しを向けられていた。いつのまにか、彼女の視線もおれと同じく足元だけしか見ることができなくなっていた。

(「うつ、とんだ昼休みになってしまった)

おれは授業の予鈴を待ちわびた。どれだけの時間をついていたのだろう。はてしなく長い時間に感じられた。

### コンピーナン、カラコンピローン

お待ちかねの予鈴。これでよつあく、この重苦しい空氣から解放されるとほっとした。

「さあ、午後の授業だ。しっかり勉強しよう」

この痴話げんかは他の生徒にも聞こえていて、屋上にいる生徒たちも睡然として、われわれの背中を見送っている。

エイプリルは恥ずかしさで、サツキは怒りで顔を真っ赤にして、おれの後についてくる。

「兄さん、今夜は家族会議だから

サツキが冷たい声でつぶやく。

## 第一章 了(後書き)

さて、第一章が終わりました。

朝起きたら、たくさんポイントが入っているのを期待して寝ます。

ノシ

壁ーー・()

ササツ

壁ーー( ) 3

壁 :

次から第三章に入ります。  
地獄の兄妹会議編です。

## 第三章 ハウスヒルフた (。・・・)

え？ どうしてそんなに妹を恐れるのかって？

そうだねえ。みんなも不思議に思うだひつ。

もちろん腕力で妹にかなわないなんてことはないし、兄妹といつても養子だから家族の中で引け目を感じているとか、そういうことで頭が上がらないわけじゃない。

それどころか、彼女には出会った日からよく懐かれたし、おれたちは仲の良い兄妹だった。おれを引き取ってくれた親父に感謝を。

いま、おれたちはとあるマンションに一人で暮らしている。親父がいれば、おれはサツキの扱いに困ることはなかつたのだが、生憎親父はおれが15歳のときに事業に失敗し、あまつさえいくつかの不法行為も明るみになってしまい、ここ6年の間は別宅で過ごしている。けつして帰宅できない「別荘」なのだが。それまでは大変裕福な家庭だったので、おれは何不自由なく、故郷にいた頃より快適な毎日を過ごしていた。

『としあき、頼む！！ サツキだけはわたしに代わって必ず守つてやつてくれ。おまえならできるー』

『わかつたよ親父、絶対にアイツはおれの手で守るからー』

刑事に連行される親父と、固い約束を交わして別れた。

親父が止めなければ、警察官を殴り倒していたかもしれない。

一時は耐え難い生活を経験したが、おれは高校をやめて働きに出た。サツキは泣いてばかりいた。せめて彼女だけは、普通にそれまで通りの暮らしをさせてやりたい。

働いて働いて、マンションを買つぐらしのお金を得ると、おれは20歳になつていた。そしてゲートの中で一年を過ごす。高校に再入学した直後のことだった。

サツキには寂しい想いをさせたから帰還後、おれにやたらとべた接してくることも最初は違和感を覚えていなかつた。

「……どうしたくなつた」

昼休みにサツキから通達された家族会議。とは言つても、いま家族はおれと彼女の二入しかいない。

おれがどうして家族会議を恐れるか。

「さあ、さつないと脱いで」

サツキが制服のネクタイをはずし、ブラウスのボタンに手をかける。

「なあ、もつこつこのせやめにしないか?」

「いいから脱げ」

サツキがあれのシャツに手をかけて力まかせに引きひき戻される。

「わかつたつて。脱ぐ脱ぐ」

おれとサツキの家族会議。それはお互いが裸になつて行われる、兄妹会議だ。兄と妹の間に隠し事があつてはならないというサツキの強い信念に基づくものである。

スルツ、パサ。ブラウス、スカート、ネクタイが順番に床に落ちていく。

「ジロツ」

おれがまだ上半身しか裸になつていないので見て、キツイまなざしがおれの肌をさす。

力チヤ力チヤ。ベルトをはずして下着一枚になる。おれの両腕には、肘から手首を覆うように赤い布が巻かれているが、これがちょっとしたマジックアイテムなのである。

スルリ。サツキはパンティを脱いでしまった。

(包め)

おれが念じると、赤い布が一反木綿のようにおれの腕から離れて、幅を伸ばしていく。露になつたサツキの胸元から下腹部をすべてぐるぐる巻きにした。

「こんなもの!」

サツキが力を込めたぐらいで破れたりはしない。ジェット燃料が燃えうつっても焼けたりはしない素材だ。

「サツキ、はしたないから女の子がかんたんに人前でマッパになるんじゃない」

「なによー、元祖裸族は兄さんのくせに

彼女の言う通り双葉家に迎え入れられた頃、おれはふだん裸でうろついていたことが多いつた。

幼いサツキは不思議そうな顔で尋ねたものだ。

「お兄ちゃん、なんでいつも裸なの?」

一般常識のないおれはとんちんかんな答えをした。

「サツキは女の子だから服を着た方がいいけど、男はふつう裸で過

「さるものだよ」

そんなおれを見て、親父は眉をひそめた。

「それは、ここでは普通ではない。夏で暑いから裸でいるのかと思つてたが、もう秋だぞ、いいかげんに服を着るんだ、としあき」「さき家の中とはいえ、おれの真似をして、サツキがパンツ一丁で歩き回るようになつて親父はおれをきびしくこなめるよ」となつた。

「いい加減にしろ。サツキの教育に悪影響があるだろつー。」

父に叱られて、おれはこの間の腰に合わせて、渋々服を着のつになつた。

「斯ぐなる上は」

サツキは魔布まふに包まれたまま勢いよく床を蹴り、おれに向かつてダイブした。

彼女の体当たりをかわしてしまつわけにもいかず、両腕を縛られている彼女をこの胸に抱きとめた。もう18歳だから身体も十分に発育して、出るとこは出て引っ込むところは引っ込んでいる。

「スキありー」

サツキの脣がおれのそれに触れようと迫つてくる。

「おつとと」

顔を背けたら一枚の花びらを合わせた感触が首筋に触れる。

「なんでおけるのよー。」

「よけろー」

「いっしゃべるー。」

ムチューシ。彼女はキスマークを見つければいいんだ！」おれの首筋を強く吸う。

「おーい、学校へ行けなくなるよ」

「あの教育実習生にキスマークを見つかればいいんだ！」

(はああ、それが目的か)

「彼女とはなんでもない。なんでもないって。仕事のこととは知ってるだろ」

薄布一枚はさむだけで、サツキがあれの胸元で暴れている。

「ミッションだけじゃない。ビヨンドでも色々な女とつき合つてたんでしょー。」

ゲートに隔てられた世界を、もっぱら地球人は「ビヨンド」と呼んでいる。「向こう側」という意味だ。

「……そんな、ことはないよ？」

「いま、一瞬間が空いた。絶対、嘘ついてるー 妹のあたしを差し置いて、他の女にうつつを抜かしやがってー」

まるでだだつ子だ。

「ふつう、そこで妹は差し置くだり」

「兄さんは、といつてはあたしだけを見てればいいのー」

ゲームに行く前から「アラソン」の氣味はあったが、最近とみにヤンデレ化が進んでいるようだ。

「おまえ、学校でもてるじゃないか。彼氏を見つけようよ

ぶわっ、ヒサツキのまぶたから涙があふれた。

## #2 (後書き)

週2～3回の更新予定。  
お気に入り登録しておくと、更新がわかりやすく便利です。

「あたしが、他の男に寝取られてもいいってのー!?

「やらして言い方すんなよ」

彼女は文才があるので、変に大人びた言葉を使うことがある。

「パパと約束したでしょ、あたしの伴侶になつて一生守るつて。誓いを守りなさいよ」

「一生とも伴侶とも言つてないぞ」

おれの口まで自分の歯が届かないのが口惜しいのか、おれの鎖骨を口にくわえた。

「くすぐつたい」

ガジガジガジと、おれの骨をかじつている。

「あたしの夫になれ、としあきー」

「だが断る!」

「なんでよ? あたしの小説のファンはみんな妹萌えばかりなのに。  
なんで兄さんはあたしに萌えないのよー」

「その理屈はおかしい」

「おかしくなんかない！ 兄さんをモデルにしたんだから本人も妹萌えであるべきなの！」

「なにその、アニメの放送が終了したら原作も終了みたいな理屈！？」

トウルツルルル。電話が鳴った。携帯電話でなくファクシミリー体型のこの電話番号を知っている人間は限られている。

「出た方が良さそうだな」

「チッ」舌打ちして、サツキは電話の方を見た。

「電話に出るから」ればずしてよ

「ああ」

(リリース)

彼女の身体をバドガールの衣装のよつに包んでいた魔布の緊縛が緩んで、ただの布になつた。

「よつ、と」

自由になつた手をおれの胸元について、彼女は起き上がろうとした。その手が胸元からずれておれの首に回された。

「むぐつ」

油断大敵。まんまと唇を奪われた。

おれ「むおい、ふあゅあぐ、でゅんわにでれ（おい、はやくでんわ  
にでる）」

サツキ「んーー。」

なるべくその時間が長く続くよう、サツキはおれの首にかけた手  
に力をこめる。

なんだか不憫な気もして、おれは妹のするがままにしていた。け  
つしてタブーや罪悪感を感じているわけでもないし。

むしろ自分を好いてくれるその感触は心地よく癒しを感じるほど  
だ。

だが、おれは彼女の気持ちを受け入れるわけにいかない。ビヨン  
ドでリリーナ姫に対しても抱いたような強い情念までは、おれはサツ  
キに対しては持ち合わせていなかった。

血がつながっていなくとも、一年も過ぎた頃にはおれは彼女を自  
分の妹として認識していた。自分は3人兄弟妹なのだと。血のつな  
がった実弟となら変わらない存在となっていた。

彼女を愛しているが、それは家族愛だ。

親父が逮捕され、高校をやめて飲食店でアルバイトを始めたとき、  
当時の吉上高校生徒たちは、涙を流しながらおれを励ましてくれた。  
一年生で生徒会の役員もしていたので、生徒会長がたいそう残念が  
つた。

担任教師は奨学金の受給を勧めてくれたが、親父の負債があまりにも大きく、債権者もまさか高校生と中学生の兄妹にその支払いを求められることはなかつたのだが、家もなく安アパートに引っ越した身では、生活費と妹の学費を稼ぐために働くことを選ぶしかなかつた。

比較的すぐに状況を理解したおれに選ぶという意識もなかつた。可能な限り、それまでの生活に近いレベルというのは、無理な話だつた。金が無いというより、それまでがありすぎていた。おれの実家も特権階級ではあつたが、物質的にはここでの暮らしの方がより恵まれていたほどだ。

きゅぽん。サツキの頭を両手で掴んで、唇を引き離した。

「にまー」

彼女が笑つた。今日は彼女に一本取られた。

機嫌が直つたのか、小さくメロディを喉でならしながら今度こそ、電話をとりにむかった。

心なしか足取りも軽い。かわいいお尻がスキップに合させて揺れる。

少し親父くさい田線に、おれはなつてているかもしねない。

彼女は一糸まとわぬ姿のまま、コードレス電話を手にとる。

「はい、双葉です……どうも」

ファックス機能付きのこの番号にかけてくるなかに個人はない。だれがかけてきたか、可能性はあらかじめ限定できる。

「ええ、どうも。前回の印税は入金を確認しました。領収書はいらないですね……えーと、入金の確認じゃない。では、なんでしょうか」

やはり出版社の丸山書店のようだ。サツキの買った小説を販売してくれている会社だ。

サツキは少女小説家としても、ちょっとした有名人なのである。個人情報が知れると、静かな生活ができなくなるので、プロフィールは簡潔に高校生とだけ、小説賞の授賞式にも出席せず、[写真も公開はしていない。

双葉サツキが小説家・宵闇心音と知っているのは、出版社の担当編集者、編集長とおれだけ。

彼女の書くものは、中高生を主な読者と想定したファンタジー小説で、いわゆる「ライトノベル」と呼ばれる分野の作品だ。

電話で話す声は大人びている。話しながらも、スラリとしたシルエットを惜しげもなくおれに見せつけている。

おれは女性の背中を見るのが好きだった。ビヨンドのお姫様たちの衣装の中でも、背中が大きく開いたドレスにおれは目を奪われていた。

童貞だったときは、異界の巫女たちの胸元を強調する装束にどぎまぎしていたが、女性慣れしてからは貴族の子女が見せる裸の背中に性的興奮を覚えるようになつて、それはいまでも変わっていない。

異界の美女たちと比べても、我が妹の背中の美しさは負けていない

い。白く柔い肌に癖のない艶やかな黒髪のコントラスト。絵画の裸婦像ともちがう今どきの若者の骨格。現代アーティストといつていいほど「様」になっていた。

彼女はいま一人のアーティストと呼ぼうか、クリエイターとして企業の担当者と意思疎通をしている。彼女が一人の大人として、社会とつながる部分だ。まるで企業のオフィスレディーのように立ち、ビジネスの電話を受けるその様は凛としてカッコいいものだった。なかなか堂々としたものだと感心する。

おれにとって自慢の妹だ。ただし、おれを性的な目で見ないでくれれば。

ところで今日はなんの話をしているのだろう。彼女の作品は先日、完結作を発売し次回作の予定は入れていない。

「新作？ 先日お伝えした通り、家事と学業のために執筆をじばらくお休みしようと思つています」

おれがビヨンドより帰還してからなら、彼女は新妻のようにおれの世話を焼いてくれている。小説もおれの帰還直後に出版したものを見終巻とするように丸山出版へ伝えその後、なにかを書いている様子はない。

「構想もしてませんし、とりあえず大学に入学してからゆっくり…待てない？ でも今のシリーズではもう書くべきことはすべて書き終えたとお伝えしましたよね」

彼女の人気作はちょうど区切りのいいところで最終巻を迎えた。折しもアニメーション番組原作としてのテレビ放送も決まったところだ。

「テレビ放映が始まるからって……それはこちらの関知することがないし、承諾はしましたけど、こちらから頼んだことではないですよ」

最終巻刊行後にテレビ放送というのは、企画がまとまるのが少し遅れたためで、ずいぶん前から話があった。ライトノベルのアニメ化には一つの目的があるらしい。一つはDVDなどの映像商品の収益。もう一つは原作の販売促進になること。

「ええ？」

少し苛立つた声で、いくつか言葉を交わした後、サツキは電話を切った。

「どうしたんだ」

妹は全裸のままテーブル上のノートPCを開いた。webブラウザを立ち上げる。

「おや？」

宵闇心音の新作情報があつた。

「発売日未定だけど続きを書いていたのか

「書いてないよ。わたしに無断で新作の発売を決めたんだって」

なんとも大胆な営業戦略である。

「おいおい、そりやまずいんじゃないの」

彼女の作品は出版社の株価に影響を与えるくらい売れている。だからシリーズを引き延ばしたいのもわからないではないが。

検索すると読者ですら完結したと思っている人間が多くだったので、まさかの続巻刊行はいろいろなブログでニュースとして取り上げられている。

タイピングするサツキの指が止まつた。

「どうしたの……」

サツキが小説を書き始めたのはおれが失踪する前からだった。幸いなことにそのころには、我が家の家計は大幅に改善していた。だからビヨンドにいる間も、彼女の経済環境を心配してはいなかつた。

帰還すると、彼女はベストセラー作家になつていた。我が家に戻ってきて、そろそろこの作品を終わりにした方がいいと助言したのはおれだつた。サツキも素直に従つた。

この作品を続けていると、そろそろ面倒になると彼女もわかつていて。

これからはゲートを行き来する人間が増える。やがては、この作品がビヨンドの国家や民衆の生活を忠実に描いていることに気づく人間ができる。そして、この小説は11大ゲートが開いて異世界の存在が広く知れ渡る前に書かれて出版したものだ。

サツキの肩が震える。泣いているのか。

「どうした？」

「どうしても『シュヴァリエ』の続きを書いてくれないと困るつて」

「勝手に発売を決められて、しつちの知つたことじゃないだろ」

「もう発売の告知をしたものを中止したら不祥事になるつて。編集の五木さん、わたしを説得できなかつたらクビになるつて、電話の向ひで泣いてた……」

「あの人か……作品を終わらせる」と同意してくれたが、上を説得できなかつたのか」

おれもサラリーマン経験があるから、企業のなかで往々にしてそういうことが起きることは想像できる。

「なにかお話してよ、兄さん」

サツキが立ち上がりておれの胸に飛び込んでくる。

ムニコッヒ、やわらかにオノマトペが原稿用紙に響く。おれの胸板にはじつへんじぶたつのマジコロがその形を変幻自在に変えていく。

「サツキ」

「不安なんだよ、兄貴。わたし、どうしたらいいの?」

そう言われては、ちょっと突き放しづらい。

おれは気づかなかつた。顔を伏せたサツキがぺろっと舌を出していたことを。

おれも彼女の背中に手を回す。相変わらずの全裸兄妹のままで。

彼女の猛アタックには正直、気の迷いを起すことが時おりないではないが、男女の関係になってしまったら、いつか関係が終わるときが来るかもしれない。

強いてこうならば、氣を持たせてしまうのが怖かった。

兄と妹の絆は永遠だ。恋人や夫婦は終わってしまえば、離ればなれにならなくてはならない。

だからギリギリのところで、おれはサッキとは男女の一線を越えないようにしている。

おれは時計を見た。

ちょうど今夜から、時間ももつすべく、彼女の作品を原作としたアニメーション番組の放送が始まる。

## 第二章 了(後書き)

二章が終わりました。  
評価点を入れていただけますと励みになります。  
m(・\_・\*)mペコッ

## 第三・五章 剣闘都市（ケントウリア）

テレビ東京系列 金曜日深夜26時30分（土曜日2時30分）。

「テレビを見るときは部屋を明るくして離れてみてね」のテロップが流れる。

昭和65年1月1日、一人の女性が赤ん坊を出産した。その日は日本でただ1日だけ、人を傷つける事故や事件が1件も起きなかつたおめでたい日。

午前9時20分、午前中にしては珍しく雷鳴が鳴り響き、嵐が近づいてくるような天候。

母は夫につぶやく。

「赤ちゃんは、なぜ泣きながら生まれてくるのでしょうか？ 残酷な世界に産み落とされたことが悲しくて泣くのかな」

少し皮肉を含んだ妃の言葉に王の顔が歪んだ。

医学書を読むと、母親の胎内から這い出して自分の力で呼吸をすることが。そのために赤ちゃんは泣くのだといつ。

「王子が息をしていません！」

「ひ、泣きなさい…」

たまに産声をあげない子どもがいると、お医師さまや助産師さんは赤ん坊に呼吸をさせるためにお尻を叩いて、無理にでも泣かせる。

「ほんな子、初めてだよ。さすがショウニアの王子」

その子もやはり泣き声をあげずに産まれ出でた子ども。取り上げてくれた助産婦たちをたいへん困らせた。

「先生、どうしましょ~」

「えい！ エイ！！」

女官がいくらお尻を叩いても、彼は泣きもしない。

「ほまつたな・・・」

すでにお尻は何度もひっぱたかれて真っ赤っかになっている。

医師が口元に耳を近づけ、呼吸を確かめた。

スーパースー。

「息はしているな」

医師は最後にお尻をぎゅっとつねった。これには王子の顔も痛みにゆがんでいた。

「ウ、ウウウウウウ」

やがて、彼は獣のような唸り声をあげた。どこから声を出してい

るのか、地獄の底から響くよくな氣味の悪い泣き声であつたといつ。

「まあ、まあ、いいだらう。ほら、肝つ玉のすわつた王子様ですよ」

赤子は心配そうに見守る王と妃の手に返されるのだった。

剣闘都（ケントウリア）とも呼ばれる傭兵国家シュヴァリアは、ビヨンド11大国家のひとつ、騎兵国家イストモスを形作る小国家のひとつである。

イストモスの正式国名はケンタウロス首長連合国と言い、部族性国家の緩やかな連合体であるのだが、大別してイストモス・ケンタウロス（西側に住むケンタウロス、重装を好む）とオストモス・ケンタウロス（東側に住むケンタウロス、弓術に長け軽装を好む）の二派に分かれている。

獣人各部族をそれぞれのハーン（族長）が統率しており、かつては偉大なる建国者を祖とする大首長を王としていたが、その血筋が途絶えた現在は首長達の合議制で國の方針が決定している。

ビヨンドの東方に位置する、鋼に身も地も包んだ騎士団國家イストモスの中で、最も過酷な兵役を國民に課すシユヴァリアは、周辺の國家や部族から「アイツらは頭がおかしい」ともっぱらの評判になるほどの戦闘民族であった。

國民男子は全て兵役に就き、主たる産業は傭兵の派遣という徹底ぶり。

シユヴァリアでは、子どもは國の財産として扱われていた。同国の子どもは7歳になると厳しい軍事訓練を課せられ、その過程で脱落した子どもを殺害していく、残つたものだけを市民として育てる。

現代日本の教育とは対極の子育てだが、シユヴァリアではまず、親は自分の子どもを自由に育てる権利を持つとはいえない。「子どもは軍事国家シユヴァリアのもの」とされ、生まれた子どもはすぐに長老の元へ連れて行かれる。そこで「健康でしつかりした子」と判定されれば、育てることが許されるのだが、病弱でひ弱な子どもは「生きていっても國の為にならない」として、子捨ての淵と呼ばれる特異な空間へ投げ捨てられてしまった。

この悪習を改めさせたのは、現王妃カーチャン・ヒムロ・シユヴァリエ。

不定期に現れる異空間移動ゲートを通称、小ゲートと人々は呼んでいたが、子捨ての淵も実は異世界に通じる次元の穴なのであった。

その穴からひょっこり現れたのは異世界人の女性、氷室果綾。なんだかんだで王太子の庇護を受けるうちにその妻となる。

やがて「児をもうけ、一人目の子どもを「トシアキ・デスブルーフ・シユヴァルツ」、二人目の王子を「シモンキン・デスマーチ・シユヴァルツ」と名付けた。

代々王家の男子は殺しても死なない不死身に近いデスブルーフ（耐死）能力を持つているがために、この戦闘民族の王族として國民から崇められていた。

7歳になつた子どもたちは学舎へ入る。王子も例外ではない。いくつかの組に分けられ、同じ規律の下、生活と學習も一緒に行われるのだった。そこでの規律は「國家の命令に服従すること」「試練に耐え、闘つたら必ず勝つこと」などで、服を着ることは許されず、頭は丸刈りにされ、革のホットパンツと足に具足（防具）をつけて訓練をした。

教育は成人するまで続き、公人として國に仕えていという自覚を常に求められ、やがて成人すると他国へ傭兵として送り出されるか、ある者は戦闘教官になり、子どもたちに訓練を施す側に回る。自國が戦争になれば、傭兵は帰國して軍団に編入されるのだった。

好戦的な部族やときには成熟した商業国でさえ、自国でもシュヴァリアと同じような教育を施そうと提唱したことがある。彼らの誤りは、シュヴァリア人の教えが普遍的な精神論であると錯覚したことだった。

子どもたちに競争をさせれば、強い国が出来るという論理は誤りである。

シュヴァリアの教育は競争教育ではない。他人と比べて優劣をはかる相対主義ではなく、シュヴァリア人として生きるために必要な下限を設けた、生死のかかつた絶対評価主義の教育である。

シュヴァリア人の教えは哲学ではなく、生きるか死ぬかの一元論でしかない。獣人国イストモスの中で最も人族に近い種族として周囲の獣人領から自国を守る、数多の獣を迎撃つ宿命が、必然としてシュヴァリア人に戦士として生き、戦士として死ぬことを最上の栄誉とする人生訓を育んだのだった。

シュヴァリアの教えを実践できるのは、シュヴァリア人だけであろう。

その証拠に、シュヴァリア人の生活には厳しい軍国主義とは相反する共生主義が根付いている。土地の均等配分、民会設置、装飾品の禁止、共同食事制が彼らの生活基盤である。

シュヴァリア人は武技を競うが、いくら戦で武功を立てても個人に栄達はない。報賞も財産も与えられはしない。

能力を認められて、指揮官になつたとしても、住む家と禄は他の兵士と変わらないのだった。

与えられるものは名誉のみ。戦を重ねれば、戦績は盾に勲章のごとく刻まれた。

王妃は王の妻となる前から、これを疑問視していた。王を驚かせた彼女の言動のはじめが、「昨日の思想によつて子どもたちを縛るのは教育ではなくて訓練に過ぎません。明日の思想によつて子どもたちを縛るのもまた訓練であります。教育は訓練ではなく、創造であるべきです。」

王曰く、

「そのような考え方をする人間にこれまで会つたことがない」

妃はゲートを通る以前にはなかつた魔力をこのビヨンドで使えるようになつていたのだが、そのことを夫と子ども以外には伝えなかつた。

少しづつ少しづつ王妃は、シユヴァリアを文明化しようと心を砕いていた。やがて、役に立たない子どもをいきなり淵に落とすという習慣も廃れていく。

国民皆兵の国は未だに残り、第一王子は軍事教練の課程に入つた。シユヴァリア人の母は皆、髪を引かれる想いで我が子を見送るが、7歳の王子は王妃に深々と頭を下げるとき、涙ひとつも見せずに入校の隊列に加わるのだった。

( セベリ セベリ )

やよこの空は 見わたす限り

かすみか雲か 句いで出づる

こわやこわや 見にゆかん )

王族であつても、教練場ではなんら特別扱いはされないが、人一倍強靭な肉体を持つ王子は脱落しそうになる他の子どもたちの手を引いて、厳しい修練を積んでいた。

夜」と、頭の中に異国の唄が響く。

( 母上、毎夜お言葉をかけていただきありがとうございます。お気持ちは嬉しいのですが、女王陛下から特別な計りこを受けることを、仲間たちの手前もあり、心苦しく思います )

「( 一、 ) 」「トシちゃん、だれも聞いてなーからママと浮ふんでもいいのよ」

トシアキ( 。。。 ) 「つーか、母上。毎晩毎晩頭の中に入つてしないでください」

「( 一、 ) し「ケンカの練習ばかりじゃ立派な王様になれます。だからいつて母の国の言葉で語りかけているのです」

トシアキ( 。。。 ) 「母上、女王陛下が国民の義務を否定するよ

「うなじ」と書いたりマズこでゅたる

周囲の学徒たちは、ぐつすりと寝入っているが、起きていたとして王子が母と会話していることに気づく者などありえない。

氷室果綾は次元の壁を超えたときに、高等魔法のひとつである「ダイレクト・ヴォイス」を会得していた。生身の人間が次元の歪みを通して思いがけない影響が身体に現れることが多い。ダイレクト・ヴォイスは直接、目の前にいる人間はあるか離れた場所にいる者の心へ直接自分の言葉を届ける力だ。相手もそれに返事をすることができます。翻つて言えば、テレパシーが使えるということなのだった。

母の目的は我が息子との交流などではない。

次代の王に相応しい教養を授けること。軍人としての才覚しかし夫を超える明君に育てなければ、母は義務感に駆られていた。

母は日本語で語りかける。子ははじめのうち、その意味を理解できなかつたが、言葉といつしょに意味が字幕のように、ふたつのイメージとなつて螺旋状にきりもみしながら頭の中へ届けられる。

人権・平和・平等。父が知らぬ概念を子は学んだ。

シユヴァリア人のトシアキにとって、それはなんだか生温く、さりとて母の心の礎となるものであることを悟り、無下にはできないのだった。

こうしてシユヴァリア人の中では唯一、現代日本人的教養の基礎と、片言の日本語を覚えた。

そして初等教練の課程を終えると、シュヴァリア人は戦争に派遣することを許された兵士とみなされる。一人前の戦士として認められることが、社会の一員となることなのだ。

やがて教練の終了日が近づいたある日、トシアキは「子捨ての淵」に立つてその渦の至る先を見つめていた。

今では小ゲートと呼ばれる空間の歪み。これはいつぞ日に現れるか予見できる人間は世界に数えるほどしかいない。

ある日、前触れもなく現れた小ゲートの報告を受けた王の顔色が青ざめた。

「国王陛下！　いえ父上、おやめください……」

父の腕に抱かれているのは、兄とは対照的に病弱な子だった弟のシモンキン。

第一王子誕生の際に、エスターイア→緑深き妖精たちの国へから贈られた祝いの品がある。

『シモン、今日はこれを着ていろ』

緑生い茂る森の王国のエルフたちの髪を織つて作られた反物。いつも風邪を引きやすい弟に、兄は癒しの加護を与える外套に仕立てられたローブを譲った。

『それでは兄者のマントが

気が引けている弟に兄は、ツヅラから別の反物を取り出してみせた。

『エルフの紡ぐ糸には癒しの魔力があるそうだが、おれはこっちの戦闘用ロープでいい』

クルスベルグへ鍛冶屋たちの鍛冶屋たちによる鍛冶屋たちのための国への住人であるドワーフたちのなぜか鍛冶職人たちの手による頑丈一点張りのロープがそこにあつた。

エルフのマントに包まれたシモンキンは今まで、子捨ての濡に投げ捨てられようとしている。

「なぜですか！ 母上の進言で子殺しはやめたではないですか！？」

シモンキンはまだ8歳だ。兄は王と長老と近衛の前に単騎立ちはだかる。手はシュヴァリア兵の刀、マシーネーの柄を握つて。

（急いで！ シモンを救つよ……）

教練の最終試練である素手による熊狩りを終えた直後に、テレパシーで母の言葉が届いた。教官の馬を奪う。初めての命令違反だった。

父は息子の反乱にも怒った様子は見せない。

「シモンは元来、育てることができないはずだつた子どもだ」

「だから、それは母上が……みんなそれがいいと、変えた方がいいと言つたではないですか！」

「内心では快く思つていらない者も多いのだ。国の伝統を壊す行いだからな」

長老会が母妃を疎ましく思つているのは年若いトシアキにも想像ができた。そもそも王が誰かの意見を聞き入れて、国の制度を変えるといふこと自体が異例なことであり、祖父王はその厳しさで一人

の王室のうち一人を、父の兄を死なせたのだといつ。

母はこの国の特異点だった。トシアキの父も歴代の王の中では、兄の死を引きずるナイーブな部分があったのかもしれない。

父王はそれゆえに妃の言葉に従つた。長老会はそれを王が妃に屈したと受け止めたのだ。王に対して全権を握る、異界から来た妃を憎んでいた。王が長老会をうらぎつたと陰口も広まる。そのために政権運営に幾度か彼らの協力を得られず、王は苦心していたのであつた。

夫の苦境を見ても、妃は妥協をしなかつた。妃の救いの手は、シユヴァリアの外にも向けられる。

福祉も社会保障もない国々が多く、子供もたちは腹をすかせぼろまとつていることも多くあつた。

だが彼女は妥協しない。

そこで長老会は王に一つの条件を提示した。

「妃は第一王子シモンキン可避さに子殺しの掟を曲げた」

「それはちがつ」と王は反論を試みたが、長老の妥協を取りつけるためには私心が無いことを証明しなくてはならなかつた。

しかしシユヴァリア最後の子殺しが行われようとしている。

弟、シモンキンを救いだせるのは遠く離れたところにいる兄だけ。

だがそれについては、妃は何も知られていなかつたのだが、テレパシーは翻つて他者の心を読み取る能力でもある。

長老の企てを知つた母は、長男に語りかける。

王宮で妃と向き合つた長老の一人は懲慄に頭を下げ、その傍らを横切ろうとした。彼女がその心をトレースしていくことに気づかず、彼女を底なしの絶望に突き落としたのだった。

兄は父による子殺しの寸前に間に合ひ、駆けつけることができた。

トシアキもまた、もはや希望が何一つなくなつても一瞬たりとも妥協しようとは思わない。

「トシアキ、王がいなければ国は立ち行かん。そして信頼と尊敬を失えば、その者は王足り得ない。シモンは無駄死にではない。崇高な犠牲なのだ」

憐れな弟。王の子にさえ生まれなければ、いまのシュガリアなら病弱さえも咎められずに済んだのに。

(まだ、八歳なのに……)

父の腕に抱かれた枯れ木のような手足、そのまま自分の運命を悟つたよつて、諦観にとらわれている。

「シモンは母の子。第一王子である前におれの弟。弟を殺す者なら、王と長老会であつたと、この兄が殺す！」

「王子、じ乱心か！」

長老たちが取り乱した様子を見せ、その中で王のみが、平静な眼差しを息子に見せていいた。

「トシアキ、これは王族の運命だ。命より国家への貢献を民に求める以上、己が命を惜しんではならん」

王はシモンを地に下ろした。

「父上？」

何をするつもりなのか、トシアキはいぶかしだ。

息子と同様に腰へ吊るした山刀を抜く。

トシアキは息を？ んだ。

（こよこよ、父と剣を交えるのか）

命知らずのシュヴァリア戦士であつても、王の剣に対する畏怖の念を捨て去ることはできない。

先刻の熊狩りに倣い、トシアキは腰を落とし膝を曲げ、踵を浮かせるように「猫足立」の構えをとる。刀は胸の前で柄を短く握り、どの方角への攻撃も防御も瞬時に対応できる姿勢だ。

熊の爪刀もかいぐり、背後をとるトシアキですが、戦士の中の戦士、父王は熊の力など軽く凌駕することを知っている。

トシアキは青銅の剣を携え、弟のシモンを血と暴力の国から引き離し、どこかこの世の遠くにある甘い果樹園に連れて行かなければならぬ。

母は言った。

「国家にも人格がある。子捨ての痛みが、国を成長させはしない。子どもを解放するよう王が言い渡さなければ、シュバリアの民が神々の栄光に近づくことはないであろう」

トシアキは微笑んで、その言葉に聞き従つていた。

「トシアキ、王妃の言葉は毒の林檎と長老会は考へてこる。おまえもそれを耳にして毒されたようだな」

「母を侮辱するなど、父上ひじくもない」

「王には逃れられぬ宿命がある」

父の手から王子のもと同じ形の山刀・マシュー・テが離れる。それは王の足下の大地に突き立つた。

(?)

戦士の長である王が刀を捨てるなど有り得ない。

「その宿命を背負つ覚悟があるか

「覚悟とは?」

「本当に父を殺す覚悟はあるか?」

「シモンキンの命を賭けての決闘ならば、受けて立つ所存

緊張に、ギリッと奥歯を噛み締める音が鳴る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0162w/>

---

異界嫁日記

2011年11月30日16時49分発行